

## 法科大学院の定員規模及び公的支援の在り方に関する参考資料

### (法科大学院の定員規模に主に関連する資料)

- 法科大学院における平成27年度の入学者選抜の状況 . . . 3
- 課題を抱える法科大学院の入口などの状況 . . . 4
- 入学定員の適正化の経過（法科大学院全体の状況） . . . 5
- 志願者数、入学定員及び実入学者数の推移 . . . 6
- 入学定員・組織見直しに係る施策の実施状況について . . . 7
- 各法科大学院の入学定員及び実入学者数の推移 . . . 9
- 司法試験合格者の推移と実態 . . . 11

### (公的支援の在り方に主に関連する資料)

- 「法科大学院公的支援見直し加算プログラム」報告書等の作成について . . . 13  
(依頼) (平成27年5月27日 事務連絡)
- 各法科大学院の基礎データ (資料2-1より再掲) . . . 37



# 法科大学院における平成27年度の入学者選抜の状況

(平成27年4月1日現在 文部科学省専門職大学院室調べ)

	入学定員	志願者数	受験者数	合格者数	競争倍率 (受験者数/合格者数)	入学者数	入学定員 充足率※2 (入学者数/入学定員)
平成27年度	3,169人	10,370人	9,351人	5,012人	1.87	2,201人	0.69
(平成前年度 26年度)	3,809人 ▲640人 (▲16.8%)	11,450人 ▲1,080人 (▲9.4%)	10,267人 ▲916人 (▲8.9%)	5,139人 ▲127人 (▲2.5%)	2.00 ▲0.13	2,272人 ▲71人 (▲3.1%)	0.60 +0.09
ピーク時	5,825人 ▲2,656人 (▲45.6%) (平成19年度)	72,800人 ▲62,430人 (▲85.8%) (平成16年度※1)	40,810人 ▲31,459人 (▲77.1%) (平成16年度)	10,006人 ▲4,994人 (▲49.9%) (平成18年度)	4.44 ▲2.57 (平成16年度※1)	5,784人 ▲3,583人 (▲61.9%) (平成18年度)	1.03 ▲0.34 (平成16年度※1)

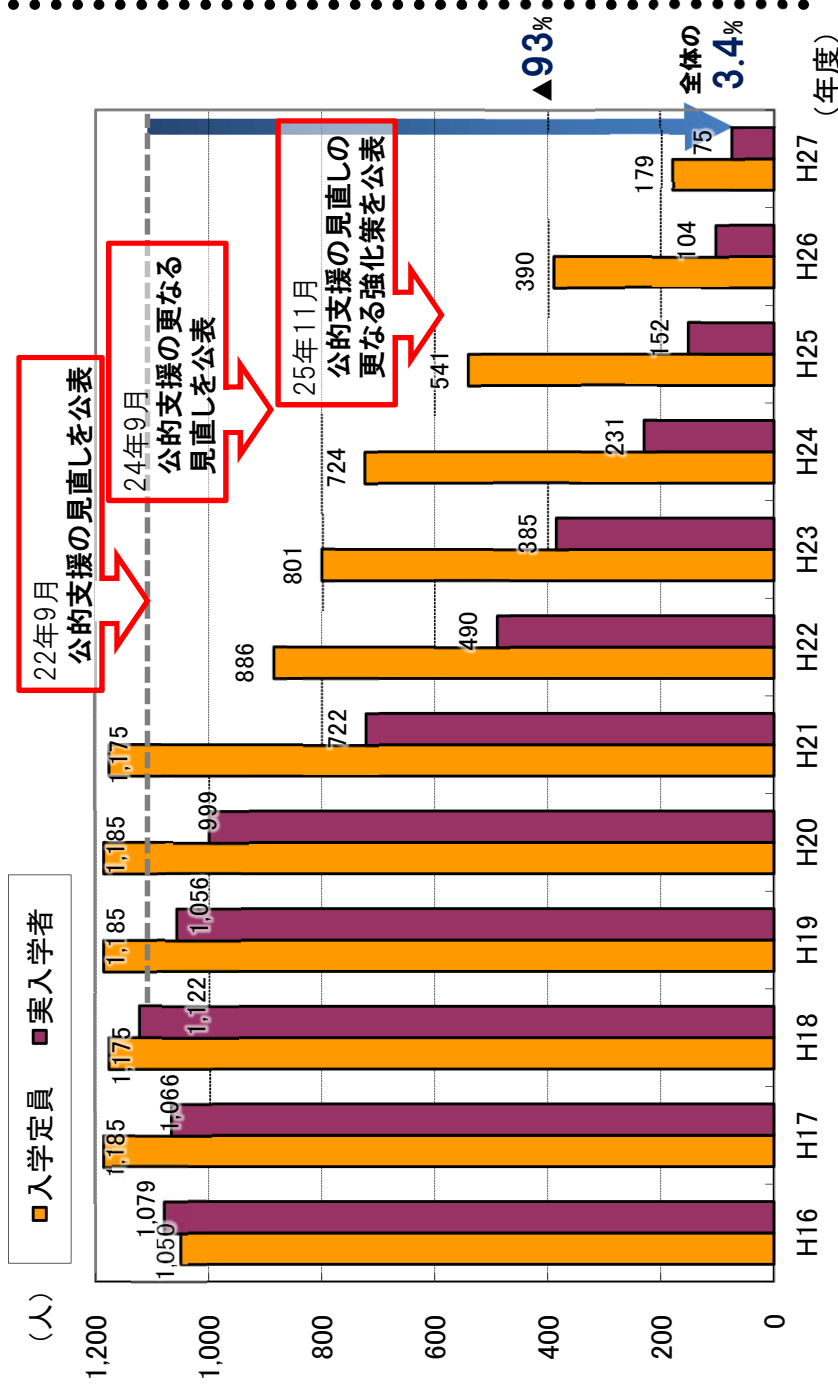
※1 平成16年度は新制度への移行時に当たる。ちなみに、平成17年度の志願者数は41,756人(▲31,386人(▲75.2%))、入学定員充足率は0.95(▲0.26)、競争倍率は3.13(▲1.26)。

※2 入学定員割れの法科大学院は、全54校中50校(93%)。このうち、入学定員を75%以上充足している法科大学院は16校、入学定員が50%に満たない法科大学院は23校。

# 課題を抱える法科大学院の入口などの状況

- 『合格率に課題がある法科大学院』では、ピーク時に比べ、実入学者数が約90%減と大幅に減少
- 学生募集停止を公表した法科大学院は29校、ピーク時の74校から45校に減少

## 司法試験合格率が全国平均の半分未満の法科大学院22校の状況



- (参考) 学生募集停止を公表した法科大学院 計29校
- 22年表明
    - 姫路獨協大学 (23年4月停止、25年3月廃止)
  - 23年表明
    - 大宮法科大学院大学 (25年4月停止)
      - ※桐蔭横浜大学と統合
  - 24年表明
    - 明治学院大学 (25年4月停止)
    - 駿河台大学 (25年4月停止)
    - 神戸学院大学 (25年4月停止、27年3月廃止)
  - 25年表明
    - 東北学院大学 (26年4月停止)
    - 大阪学院大学 (26年4月停止)
    - 島根大学 (27年4月停止)
    - 大東文化大学 (27年4月停止)
  - 26年表明
    - 信州大学 (27年4月停止)
    - 東海大学 (27年4月停止)
    - 関東学院大学 (27年4月停止)
    - 新潟大学 (27年4月停止)
    - 龍谷大学 (27年4月停止)
    - 久留米大学 (27年4月停止)
    - 鹿児島大学 (27年4月停止)
    - 香川大学 (27年4月停止)
    - 広島修道大学 (27年4月停止)
    - 獨協大学 (27年4月停止)
    - 白鷺大学 (27年4月停止)
    - 東洋大学 (28年4月停止予定)
    - 静岡学院大学 (28年4月停止予定)
    - 愛知産業大学 (28年4月停止予定)
    - 京都市立大学 (28年4月停止予定)
    - 熊本大学 (28年4月停止予定)
  - 27年表明
    - 山梨学院大学 (28年4月停止予定)
    - 神奈川大学 (28年4月停止予定)
    - 國學院大学 (28年4月停止予定)
    - 中京大学 (28年4月停止予定)
- 25年11月の「公的支援の見直し」の更なる強化策の公表後に表明 (21校)

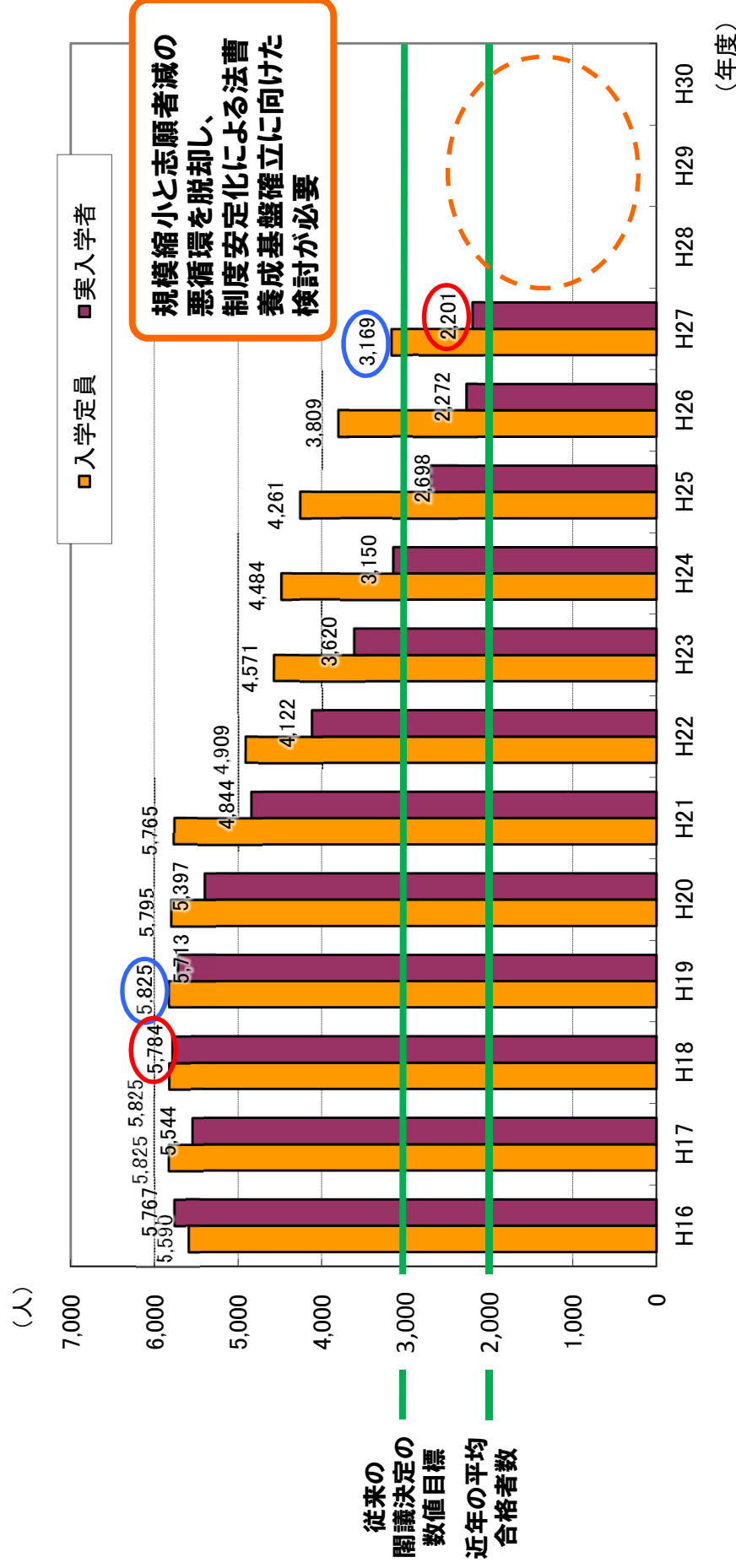
なお、上記課題を抱える22校の中には、

- 既に学生募集停止を公表した法科大学院19校のほか、
- 社会人対応等の特性を有する法科大学院が含まれている

# 入学定員の適正化の経過（法科大学院全体の状況）

## これまでの成果

- ① **入学定員の削減**：平成22年度から、全ての法科大学院が削減（約50%の減）
- ② **競争倍率の確保**：合格者数を抑制し、実入学者数も、大幅減少（約60%の減）



(注) グラフ中、「青い囲み」は入学定員のピーク時から現在までの減少の推移、また、「赤い囲み」は実入学者数のピーク時から現在までの減少の推移。

## 志願者数、入学定員及び実入学者数の推移

- ・ 司法試験合格率の低迷等を背景に、法科大学院志願者数や入学者数が減少。
- ・ 特に、**法学未修者**(主として社会人、法学部以外の出身者)が**大幅に減少**。

※( )内の数字は、ピーク時を100としたときの割合

年度	志願者数	入学定員	入学者数	法学既修者		法学未修者	
				人数	割合	人数	割合
平成16年度	72,800	5,590	5,767 (99.7)	2,350 (108)	3,417 (94.8)		
平成17年度	41,756	5,825	5,544 (95.9)	2,063 (94.7)	3,481 (96.6)		
平成18年度	40,341	5,825	5,784 (100)	2,179 (100)	3,605 (100)		
平成19年度	45,207	5,825	5,713 (98.7)	2,169 (99.5)	3,544 (98.3)		
平成20年度	39,555	5,795	5,397 (93.3)	2,066 (94.8)	3,331 (92.4)		
平成21年度	29,714	5,765	4,844 (83.7)	2,021 (92.7)	2,823 (78.3)		
平成22年度	24,014	4,909	4,122 (71.3)	1,923 (88.3)	2,199 (61.0)		
平成23年度	22,927	4,571	3,620 (62.6)	1,916 (87.9)	1,704 (47.3)		
平成24年度	18,446	4,484	3,150 (54.5)	1,825 (83.8)	1,325 (36.8)		
平成25年度	13,924	4,261	2,698 (46.5)	1,617 (74.2)	1,081 (30.0)		
平成26年度	11,450	3,809	2,272 (39.3)	1,461 (67.0)	811 (22.5)		
平成27年度	10,370	3,169	2,201 (38.1)	1,431 (65.7)	770 (21.4)		

## 入学定員・組織見直しに係る施策の実施状況について

年度	施策	入学定員・組織見直し	
		入学定員	学生募集停止・廃止
H19		5,825人 (ピーク)	
H20		5,795人 対前年度 ▲30人 (▲0.5%) 対ピーク時 ▲30人 (▲0.5%) 削減校数 1校	
H21	H21.4 中教審で「 <b>入学定員の見直し</b> 」を提言  競争性の確保が困難になっている法科大学院については、質の高い入学者を確保するため、 <b>早急に入学定員の見直し</b> など、競争的な環境を整えることが不可欠	5,765人 対前年度 ▲30人 (▲0.5%) 対ピーク時 ▲60人 (▲1.0%) 削減校数 2校	
H22	H22.9 「 <b>公的支援の見直しについて</b> 」を公表  「 <b>司法試験合格率</b> 」及び「 <b>入学者選抜における競争倍率</b> 」に係る指標を設定	4,909人 対前年度 ▲856人 (▲14.8%) 対ピーク時 ▲916人 (▲15.7%) 削減校数 53校	【 <b>学生募集停止表明</b> 】 H22.5 姫路獨協大(H23.4より停止、H25.3をもって廃止)
H23		4,571人 対前年度 ▲338人 (▲6.9%) 対ピーク時 ▲1,254人 (▲21.5%) 削減校数 23校  中教審提言等を踏まえ、H23年度までに全ての法科大学院が入学定員を削減	【 <b>学生募集停止表明</b> 】 H23.8 大宮法科大学院大(H25.4より停止) → 桐蔭横浜大と統合
H24	【 <b>公的支援の見直し対象(6校)</b> 】 大宮法科大学院大、大東文化大、東海大、明治学院大、関東学院大、桐蔭横浜大  H24.9 「 <b>公的支援の更なる見直しについて</b> 」を公表  「 <b>入学定員充足率</b> 」に係る指標を追加	4,484人 対前年度 ▲87人 (▲1.9%) 対ピーク時 ▲1,341人 (▲23.0%) 削減校数 8校	【 <b>学生募集停止表明</b> 】 H24.5 明治学院大(H25.4より停止) H24.7 駿河台大(H25.4より停止) 神戸学院大(H25.4より停止、H27.3をもって廃止)  H25.3 東北学院大(H26.4より停止)
H25	【 <b>公的支援の見直し対象(4校)</b> 】 島根大、大東文化大、東海大、愛知学院大  H25.4~H25.6 全ての法科大学院に対する情報提供、検討要請  H25.11 「 <b>公的支援の見直しの更なる強化について</b> 」を公表  全ての法科大学院を対象に、これまでの成果等を多面的・総合的に評価するとともに、先導的な取組の提案も評価して、 <b>公的支援の配分にメリハリを付ける</b> 仕組みに改善	4,261人 対前年度 ▲223人 (▲5.0%) 対ピーク時 ▲1,564人 (▲26.8%) 削減校数 9校	【 <b>学生募集停止表明</b> 】 H25.6 大阪学院大(H26.4より停止) H25.6 島根大(H27.4より停止)  H25.12 大東文化大(H27.4より停止) H26.1 東海大(H27.4より停止) H26.2 信州大(H27.4より停止) H26.3 関東学院大(H27.4より停止) 新潟大(H27.4より停止) 龍谷大(H27.4より停止) 久留米大(H27.4より停止)
H26	【 <b>公的支援の見直し対象(18校)</b> 】 愛知学院大、大東文化大、鹿児島大、久留米大、駒澤大、東海大、日本大、福岡大、甲南大、中京大、白鷗大、名城大、京都産業大、國學院大、獨協大、龍谷大、島根大、神奈川大  ~H26.6 全ての法科大学院に対する情報提供、検討要請	3,809人 対前年度 ▲452人 (▲10.6%) 対ピーク時 ▲2,016人 (▲34.6%) 削減校数 26校	【 <b>学生募集停止表明</b> 】 H26.4 鹿児島大(H27.4より停止) H26.5 香川大(H27.4より停止) H26.5 広島修道大(H27.4より停止) H26.6 獨協大(H27.4より停止) 白鷗大(H27.4より停止) H26.9 東洋大(H28.4より停止) H26.10 静岡大(H28.4より停止) H26.12 愛知学院大(H28.4より停止) H27.3 京都産業大(H28.4より停止) H27.3 熊本大(H28.4より停止)
H27		3,169人 対前年度 ▲640人 (▲16.8%) 対ピーク時 ▲2,656人 (▲45.6%) 削減校数 34校	H27.6 山梨学院大(H28.4より停止) H27.6 神奈川大(H28.4より停止) H27.6 國學院大(H28.4より停止) H27.6 中京大(H28.4より停止)
H28		2,724人 対前年度 ▲445人 (▲14.0%) 対ピーク時 ▲3,101人 (▲53.2%) 削減校数 22校	









# 司法試験合格者の推移と実態

- ・ 予備試験経由での司法試験合格者は年々増加し、全体の約10%を占めるまでになっている。
- ・ 上記のうち、出願時、学部在学中又は法科大学院在学中の者を除くと、予備試験経由での司法試験合格者が占める割合は約3%となる。

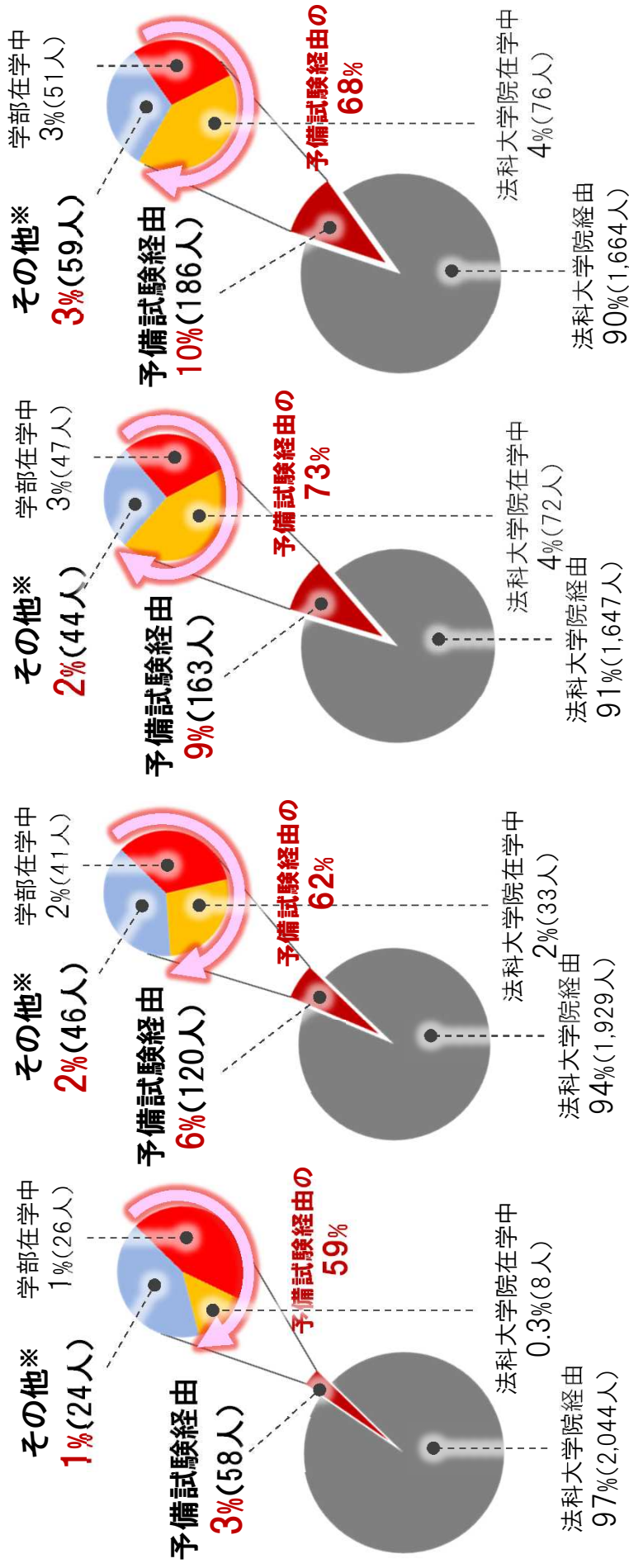
## 司法試験合格者の内訳

H24

H25

H26

H27



※その他：大学卒業・中退、法科大学院修了・中退、法科大学院以外の大学院修了・中退、在学中



法科大学院を置く  
各国立大学・私立大学事務局 御中

文部科学省高等教育局  
専門教育課専門職大学院室

「法科大学院公的支援見直し加算プログラム」  
報告書等の作成について（依頼）

このたび、「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について」（平成25年11月11日文部科学省通知）において通知した「法科大学院公的支援見直し加算プログラム」を実施します。

つきましては、本プログラムに提案する場合は、別添様式の報告書を作成のうえ、平成27年9月30日（水）までに下記メールアドレス及び宛先にご提出ください。

なお、「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について」（平成25年11月11日文部科学省通知）に記載の各事項の定義等については、別添1及び2を参照の上、作成願います。

また、別添1において社会人の定義及び法学系課程の範囲を示していますが、この定義・範囲に該当する人数を調査票に記入のうえ、平成27年6月30日（火）までに下記メールアドレスにご提出ください。

記

1. 報告書の提出方法

【郵送先】〒100 - 8959 東京都千代田区霞が関3丁目2 - 2文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室 法科大学院公的支援見直し加算プログラム担当 行

【メールアドレス】 sen-ps@mext.go.jp

【提出部数】15部

2. 今後のスケジュール（予定）

平成27年9月30日 提出締切り

10月～11月 審査

12月下旬 評価結果等について公表

3. 留意事項

- ・報告書提出にあたっては、取組の実現可能性を確認するため、関係する参考資料を添付してください。参考資料の分量はA4サイズ20頁程度とし、文字は読むことができる大きさにしてください。
- ・審査に当たり、関係者にヒアリングを行う場合がありますので、ご承知置きくだ

さい。

- ・ 今後の審査により、追加資料を提出していただく場合がありますので、ご承知置きください。
- ・ 提案する当該取組と認証評価との関係性において気になる点があれば下記担当までご相談ください。
- ・ 平成26年度審査において加算された取組の進捗状況については、後日様式を送付しますので、ご報告願います。また、新規分の判定に当たっては、平成26年度審査において加算された取組の進捗状況も勘案して判定しますのでご留意下さい。

以上

**【本件担当】**

文部科学省高等教育局専門教育課専門職大学院室 畑、竹内  
〒100 - 8959 東京都千代田区霞が関3丁目2 - 2  
TEL : 03 - 5253 - 4111(2497)/e-mail : sen-ps@mext.go.jp

## 各事項の定義等について

法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について(平成25年11月11日文部科学省)の各事項については以下の通りとするのでご留意ください。

### 基礎額算定にあたり

#### 社会人の定義の明確化

「大学卒業後1年以上の社会経験を有する者」を対象とする。

#### 法学系課程の範囲の明確化

学士(法学)を授与している学部学科専攻等を対象とする。

該当する例：鹿児島大学 法文学部法政策学科  
 該当しない例：横浜国立大学 経済学部経済システム学科  
 信州大学 経済学部経済システム法学科

#### 夜間開講の定義の明確化

夜間(専門職大学院設置基準第35条第1項、大学院設置基準第14条)で完結する課程を対象とする。

夜間開講(「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について」(平成25年11月11日文部科学省通知)別表1-6参照)については、平成27年度に開講しているものを対象とする。

### (参考)

#### 法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について

(平成25年11月11日文部科学省通知)(抄)

#### 2. 強化策の概要

##### (1) 基礎額の設定方法について

全ての法科大学院について、下記に掲げる4指標に照らしてこれまでの取組や成果等を評価し、その状況に応じて配点された点数の合計に応じて、3つの類型に分類する。

- ・ 司法試験の累積合格率(累積合格者数/累積受験者数)
- ・ 法学未修者の直近の司法試験合格率(法学未修者の合格者数/法学未修者の全受験者数)
- ・ 直近の入学定員の充足率 2(実入学者数/入学定員)
- ・ 法学系以外の課程出身者の直近の入学者数・割合(法学系以外の課程出身者の入学者数/全入学者数)又は社会人の直近の入学者数・割合(社会人の入学者数/全入学者数)

上記の分類を行った際、第3に該当した法科大学院については、地域性や夜間開講の取組に配慮する観点から、下記に掲げる指標を加えた5指標の合計点数に基づき、類型を見直す。

- ・ 地域配置の状況(同一都道府県内の校数)又は夜間開講の状況(夜間開講の実施の有無)

#### 地域配置の明確化

地域配置(「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について」(平成25年11月11日文部科学省通知)別表1-5参照)については、平成27年度に学生募集を行った法科大学院数をカウントする。

**加算条件審査にあたり**

## 職域拡大の対象の明確化

法曹有資格者及び法科大学院修了者双方を対象とした職域拡大の取組を対象とする。

## 第3における加算プログラムとして例示された「連合」の具体的な内容の明確化

連合大学院方式を原則とする。

現在抱えている課題を解決する実質的な統廃合・共同実施について、連合大学院方式に含めるものとする。

- (例) 第1などの法科大学院を基幹校として連合大学院を構成し、入学選抜状況及び司法試験合格状況等において改善が図られること。
- (例) 第2などの法科大学院を基幹校として連合大学院を構成し、更に第1などの法科大学院から教員の派遣やプログラムの提供を実施し、入学選抜状況及び司法試験合格状況等において改善が図られること。

- 1 第2の法科大学院同士で構成される連合大学院についても同様の扱いとする。
- 2 「連合」の進捗状況については、「法科大学院公的支援見直し加算プログラム報告書(別添)」において大学間の協議及び意思決定の状況について記載を求めることとする。



## 公的支援の見直しの更なる強化策における加算対象となるプログラムの具体的な着眼点のイメージ

文部科学省より、平成 25 年 11 月に公表した「公的支援の見直しの更なる強化策」に示された加算プログラムの例示に関し、現在、各大学において具体的な方策が検討されているところですが、今後実施する審査の過程において評価すべき着眼点として、更に具体的には以下のようなものが考えられます。

### 1. より魅力ある法科大学院教育を目指した「先導的な教育システムの構築」の着眼点の例

- ・学部教育との密接な連携に基づくなど、質の保証が担保された早期卒業や飛び入学を活用した優秀者養成コースの設定
- ・大学、地方公共団体、地元法曹が協力した地元還流型の奨学金制度の創設など地方への法曹定着促進の仕組みや、社会人や男女問わず幅広い層まで対象を広げた法曹志願者増加につながる仕組みの確立
- ・法学未修者に対して法律基本科目の基礎・基本を徹底的に修得させるためのカリキュラム構築など法学未修者教育充実のための教育課程の抜本的な見直し
- ・法曹実務家や法科大学院在学生の希望・特性に応じた博士後期課程への円滑な進学支援など、今後の法科大学院教育を牽引する理論と実務に精通した教員養成の仕組みの創設

など

### 2. 国際化対応等の社会的ニーズを踏まえ、法曹に加えてこれまで十分に対応できていなかった分野に人材を輩出する「先導的な教育プログラムの開発」の着眼点の例

- ・LL.M 等資格取得を目的とした一定規模の学生による海外 LS 留学促進プログラムの開発・実施
- ・留学生受入れとともに、英語による知的財産法や国際法などの授業科目の拡充や特別講義の開設などの国際化対応プログラムの開発・実施
- ・企業法務・公務のみならず、国内外問わず社会の様々な分野での活躍を視野に入れた、幅広くかつ質の高いエクスターンシップ先の開拓など実務基礎教育充実を通じた職域拡大

## プログラムの開発・実施

- ・社会で生じる最新の法的課題に対応した継続教育プログラムの開発・実施
- ・課題発見能力・事実認定能力・法的分析能力といった高度な法的知識・能力を兼ね備えた人材養成の機能強化につながる教育プログラムの開発

など

### 3. 「大学による就職支援」の先導的な取組の着眼点の例

- ・大学と企業・地方公共団体との間で協定等を締結するなど組織的な連携を通じて、予防法務や政策法務とともに訴訟・M & A対応など就職後の職務等とのマッチングを視野に入れた現場の要請に応え得る教育カリキュラムの提供
- ・法曹有資格者など法科大学院修了生に対し、卒業後まで視野に入れたきめ細やかな就職支援体制の整備

など

### 4. 「他類型校に対する支援プログラム」の着眼点の例

- ・他類型の法科大学院との実質的な連携策
  - 教育力の高い教員の派遣などの教育支援の実施
  - ICTを活用した質の高い授業の配信
  - 他類型の法科大学院の学生を一定数、一定期間受け入れて授業受講

など

### 5. 課題解決に向けた「実質的な連合」の着眼点の例

- ・法曹養成教育で成果を挙げることが見込まれる法科大学院を基幹校とし、参加校の協力を得る体制となる連合大学院の設置
- ・複数の大学がそれぞれ優位性を持つ教育研究資源を結集し、より魅力ある教育の実現を目指すため、参画する法科大学院が有する教員や特色ある教育プログラムなど教育資源を融合させた教育課程となる共同教育課程の設置
- ・教育力向上など課題解決や地域に教育拠点を残しながら体制を充実させることに配慮した統廃合

大学全体での検討・意思決定を踏まえた法科大学院による組織的な取組であること。

5. の実質的な連合を通じて、法科大学院における教育の質が向上することにより、入学志願者、法科大学院入学試験合格者、入学者の増加（見込み）があること。  
司法試験の合格状況の改善（見込み）があること。

## 【継続】法科大学院公的支援見直し加算プログラム報告書

大学名：〇〇大学

研究科専攻名：〇〇研究科〇〇専攻

### 取組名

#### 加算プログラムとして提案する継続取組の概要

※法科大学院による組織的な取組であること。

※取組の進捗状況とそれによる影響・効果や既に上げられた成果について記載して下さい。

※新たな取組みを追加される場合には、それが分かるように記載して下さい。また、期待される成果について記載して下さい。

※変更点がある場合はそれが分かるように記載して下さい。また、変更の理由も記載して下さい。

※地域との連携がある場合は、それが分かるように記載して下さい。

(「連合」の取組の場合、大学間の協議及び意思決定の状況(協定書及び覚書、役員会の議事録等)について記載してください。)

#### 【記載例】

第1類型: 第2、3該当校への支援プログラム

第2類型: 第1～3該当校との連携、連合

第3類型: 第1～2該当校との連合(地域校・夜間校のみを含む)

※「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について(平成25年11月11日)」別表3

## 【新規】法科大学院公的支援見直し加算プログラム報告書

大学名：〇〇大学

研究科専攻名：〇〇研究科〇〇専攻

取組名

加算プログラムとして提案する新たな取組の概要

※法科大学院による組織的な取組であること。

※期待される成果について記載して下さい。

※地域との連携がある場合は、それが分かるように記載して下さい。

※昨年度審査において加算されなかった取組について、判定理由に記載された改善点に対応の上、再度提出をする場合は、【新規】の様式に記入して下さい。

(「連合」の取組の場合、大学間の協議及び意思決定の状況(協定書及び覚書、役員会の議事録等)について記載すること。)

### 【記載例】

第1類型：第2、3該当校への支援プログラム

第2類型：第1～3該当校との連携、連合

第3類型：第1～2該当校との連合(地域校・夜間校のみを含む)

※「法科大学院の組織見直しを促進するための公的支援の見直しの更なる強化について(平成25年11月11日)」別表3

## 【新規】法科大学院公的支援見直し加算プログラム報告書

大学名：〇〇大学

研究科専攻名：〇〇研究科〇〇専攻

取組名

これまでの取組の概要

※「加算プログラムとして提案する新たな取組」に関連するこれまで法科大学院での取組の概要について記載してください。

これまでの取組の教育成果と自己評価

※「加算プログラムとして提案する新たな取組」に関連するこれまでの取組の教育成果とそれに対する自己評価を記載してください。

これまでの取組と新たな取組の関連性・継続性

※「加算プログラムとして提案する新たな取組」とこれまでの取組の関連性や継続性について記載してください。

# 調査票

○別添1「各事項の定義等について」の定義・範囲に該当する人数を回答欄に記入してください。

なお、これらの数字は、「平成27年度法科大学院入学者選抜実施状況調査について(依頼)」(平成27年3月23日付け事務連絡)に回答していただいた入学者数とは定義・範囲が異なりうるため必ずしも人数が一致しません(下記参考)。

大学名	法学系以外の課程の出身者の入学者数※	社会人の入学者数※※
〇〇大学		

※「法学系以外の課程の出身者の入学者数」の欄には、法学系課程(学士(法学)を授与している学部学科専攻等)以外の課程の出身者の平成27年度の入学者数を記入してください。

※学士(法学)の( )内が、類似の名称の場合(ex.学士(法律学)、学士(法経)、学士(〇〇法学)など)、法学系課程の範囲内に含まれるのかについては、学士(法律学)は、法学系課程の範囲内に含まれるものとし、その他の名称は、法学系課程の範囲内に含まない(ex.学士(法経)、学士(〇〇法学)など)ものとします。

※※「社会人の入学者数」の欄には、大学卒業後1年以上の社会経験を有する者の平成27年度の入学者数を記入してください。

【参考】「平成27年度法科大学院入学者選抜実施状況調査について(依頼)」(平成27年3月23日付け事務連絡)での定義

○法学系以外の課程は、学科別系統分類表(文部科学省ホームページ)により、法学に分類される課程以外のものが該当する。

○社会人は、各大学(法科大学院)における定義の社会人が該当する。

平成25年11月11日  
文 部 科 学 省

## 法科大学院の組織見直しを促進するための 公的支援の見直しの更なる強化について

### 1. 趣旨

- 本年7月、政府の法曹養成制度関係閣僚会議で決定された「法曹養成制度改革の推進について」（以下「閣僚会議決定」という。）では、法科大学院に対し、公的支援の見直しの強化策など入学定員の削減方策の検討、実施など抜本的な組織見直しに早急に取り組むことが求められている。
- このため、文部科学省として、本年9月の中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会の提言も踏まえ、課題が深刻な法科大学院の抜本的な組織見直しを早急に促す観点から、現行の公的支援の見直しの更なる強化を図ることとする。

### 2. 強化策の概要

- 今回、強化を行う公的支援の見直しについては、
  - ・ 司法試験合格状況、入学定員充足状況に加え、多様な人材確保の状況、地域配置や夜間開講の状況といった多様な指標に基づき、現在の入学定員充足状況の傾向を勘案し減額された基礎額を設定
  - ・ その上で、先導的な教育システムの構築や教育プログラムの開発、質の高い教育提供を目指した連携・連合など優れた取組の提案を評価して加算
 する仕組みとする。
- その際、見直しの対象となる公的支援について、国立大学は、国立大学法人運営費交付金のうち法科大学院に係る教員経費相当額<sup>※1</sup>を、私立大学は、私立大学等経常費補助金の特別補助／法科大学院支援における専任教員に係る補助額とする。
- 下記方法に基づき、基礎額及び加算額を算出した上で両者の合計が見直し対象の公的支援の額の範囲内となるよう調整を行うこととするが、最終的な額の決定は、予算の範囲内で行うこととする。

※1 教員経費相当額は、専門職大学院設置基準上の必置専任教員数に対して一人当たりの教員給与を乗じて得られた金額を基本とする。



## (1) 基礎額の設定方法について（※別表1、2参照）

○ 全ての法科大学院について、下記に掲げる4指標に照らしてこれまでの取組や成果等を評価し、その状況に応じて配点された点数の合計に応じて、3つの類型に分類する。

- ・ 司法試験の累積合格率（累積合格者数／累積受験者数）
- ・ 法学未修者の直近の司法試験合格率（法学未修者の合格者数／法学未修者の全受験者数）
- ・ 直近の入学定員の充足率<sup>※2</sup>（実入学者数／入学定員）
- ・ 法学系以外の課程出身者の直近の入学者数・割合（法学系以外の課程出身者の入学者数／全入学者数）又は社会人の直近の入学者数・割合（社会人の入学者数／全入学者数）

※2 直近の入学定員の充足率の指標については、以下の特例を設けることとする。

- 原則、前年度の入学定員の充足率に基づき判定する。
- この入学定員充足率を算出する際、各年6月末までに、次年度の入学定員の見直し等を行い、文部科学省に報告した場合に限り次年度の入学定員の数値を用いることができることとする。
- ただし、見直しを行った結果、次年度の入学定員が15人未満となる場合は適正な規模の教育環境を維持する観点から、入学定員の見直しを行ったものとはみなさない。

○ 上記の分類を行った際、第3に該当した法科大学院については、地域性や夜間開講の取組に配慮する観点から、下記に掲げる指標を加えた5指標の合計点数に基づき、類型を見直す。

- ・ 地域配置の状況（同一都道府県内の校数）又は夜間開講の状況（夜間開講の実施の有無）

○ 本年6月の「法曹養成制度検討会議取りまとめ」において、入学定員については、現在の入学定員と実入学者数との差を縮小していくようにするなどの削減方策を検討・実施し、法科大学院として行う教育上適正な規模となるようにすべきとの指摘があることから、類型に応じて、現在の入学定員の充足状況の傾向を勘案し減額算定した公的支援の基礎額を設定する。

## (2) 加算の考え方について（別表3参照）

○ 閣僚会議決定を踏まえ、公的支援の見直しの更なる強化に当たっては、抜本的な組織見直しの促進とともに、より魅力ある法科大学院教育を目指した先導的な教育システムの構築や教育プログラムの開発、企業や自治体等と組織的に連携した就職支援、他の法科大学院に対する教育支援や教育の質向上につながる法科大学院間の連携・連合といった取組の促進を図ることとする。

○ 具体的には、各法科大学院によって上記類型ごとに設定された加算条件に該当する取組を実施しようとする場合、当該取組の提案を文部科学省に対し行うことができることとする。

- 文部科学省では、各法科大学院から提案された取組について優れた先導的な取組として評価できるものかどうかを判定するため、有識者からなる会議（以下「審査委員会」という。）を設置し、専門的な調査・審議を行うこととする。
- この審議結果を踏まえ、文部科学省において、優れた先導的な取組と評価されたものに  
応じて加算率を算出することとする。なおその際、前年度の入学者選抜における競争倍  
率（受験者数／合格者数）が2倍未満の場合は加算率を減ずることとする。
- 最終的には、基礎額の設定時に減額された額の合計（国立大学法人運営費交付金と私学  
大学等経常費補助金で別々に算出する）の範囲内で、加算額の合計が収まるよう一律の  
割合を乗じて加算額を調整することとする。
- なお、上記の審査に際して必要となる事項については、審査委員会において検討するこ  
ととする。

### 3. 実施時期

平成 27 年度予算から実施することを予定。具体的なスケジュールはおおむね以下のとおり。

～平成 26 年 9 月末日	司法試験の結果を踏まえ、類型ごとに設定された加算条件に該当する取組を実施しようとする法科大学院は、当該取組の提案を申請
平成 26 年 10 月～11 月中旬	審査委員会における審査
～平成 26 年 12 月	国立大学について、国立大学法人運営費交付金の予算編成過程において公的支援の額が決定
～平成 28 年 3 月	私立大学について、私立大学等経常費補助金の補助金交付過程において公的支援の額が決定

【別表 1】 指標と点数の関係

		指標	点数
①	司法試験の合格率	累積合格率 <sup>※3</sup> が全国平均以上	12点
		累積合格率が全国平均未満の場合	
		・ 下記以外 ・ 「合格率が全国平均の半分未満」が3年連続した場合	6点 0点
②	法学未修者の司法試験の合格率	直近の合格率が全国平均以上	8点
		直近の合格率が全国平均未満の場合	
		・ 下記以外 ・ 「合格率が全国平均の半分未満」が3年連続した場合	4点 0点
③	入学定員の充足率 <sup>※4</sup>	直近の入学定員の充足率が75%以上	8点
		直近の入学定員の充足率が75%未満～50%以上	4点
		直近の入学定員の充足率が50%未満	0点
④	法学系以外の課程出身者の入学者数・割合	直近の入学者数が10人以上かつ割合が全国平均以上 上記以外	4点 0点
	----- 又は ----- 社会人の入学者数・割合	直近の入学者数が10人以上かつ割合が全国平均以上 上記以外	4点 0点
⑤	地域配置 <sup>※5</sup>	同一都道府県内に2校以下	4点
	----- 又は -----	同一都道府県内に3校以上	0点
	夜間開講 <sup>※6</sup>	実施	4点
		実施せず	0点

※3 各法科大学院の全修了者の受験者実数に対する司法試験の合格者数の割合。

※4 見直し後の入学定員の数値を用いて算出。ただし、見直し後の入学定員が15人未満である場合、入学定員の見直しを行ったものとみなさない。

※5 本施策の適用年度に学生募集を行う法科大学院数をカウントする。

※6 本施策の適用年度の開講予定に基づくものとする。

【別表 2】 点数と類型の関係

点数	類型
25 ～ 32 点	第 1
20 ～ 24 点	第 2A
15 ～ 19 点	第 2B
10 ～ 14 点	第 2C
0 ～ 9 点	第 3

【別表3】 類型と基礎額・加算条件及び加算条件と上限加算率の関係

類型	基礎額 (対 対象額)	加算条件 ※具体的には審査委員会で審査して判定	取組ごとの 加算率 (対 対象額)
第1	90%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早期卒業等を活用した優秀者養成コースの設定、法学未修者教育充実のための教育課程の抜本的な見直し、理論と実務に精通した教員養成コースの創設など、より魅力ある法科大学院教育を目指した先導的な教育システムの構築</li> <li>・LL.M取得等を目的とした海外LS 留学促進、質の高いエクスターンシップ先の開拓など実務基礎教育充実を通じた職域拡大、最新の法的課題に対応した継続教育など、法曹に加えてこれまで十分に対応できていなかった分野に人材を輩出する先導的な教育プログラムの開発</li> <li>・企業や自治体等と組織的に連携した就職支援の取組</li> <li>・第2、3 該当校への支援プログラム</li> </ul>	+5% ～ +20%
第2	A 80%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LL.M取得等を目的とした海外LS 留学促進、質の高いエクスターンシップ先の開拓など実務基礎教育充実を通じた職域拡大、最新の法的課題に対応した継続教育など、法曹に加えてこれまで十分に対応できていなかった分野に人材を輩出する先導的な教育プログラムの開発</li> <li>・企業や自治体等と組織的に連携した就職支援の取組</li> </ul>	+5% ～ +50%
	B 70%		
	C 60%		
第3	平成27年度		
	50%	・第1～2 該当校との連合	+50% ～ +60%
	平成28年度～		
	0%	・第1～2 該当校との連合（地域校・夜間校のみ）	+50% ～ +60%

※加算額については、基礎額の設定時に減額された額の合計の範囲内で対応。

※類型ごとの加算条件に係る具体的内容については、今後、中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会における検討等を踏まえ、変更があり得る。

## 「法曹養成制度改革の推進について」（抜粋）

（平成 25 年 7 月 16 日 法曹養成制度関係閣僚会議）

### 第 4 法曹養成制度の在り方

#### 2 法科大学院について

- (1) 法科大学院が法曹養成の中核としての使命を果たし、それにふさわしい教育の質を確保する観点から、以下の措置を講ずる。

ア 文部科学省において、中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会（以下「中教審」という。）の審議を踏まえ、1年以内に、公的支援の見直しの強化策など入学定員の削減方策を検討して結論を得た上、2年以内にその結論に沿った実施を開始する。

イ 閣僚会議の下で、課題を抱える法科大学院に対する裁判官及び検察官等の教員派遣の見直し方策について、上記文部科学省の公的支援の見直し強化策をも踏まえて、1年以内に検討し、結論を得る。

法務省は、2年以内にその結論に沿った実施を開始する。

また、最高裁判所においても、同様に教員派遣の見直し方策を実施することが期待される。

ウ 上記ア、イの施策を講じても一定期間内に組織見直しが進まないときは、課題が深刻で改善の見込みがない法科大学院について、法曹養成のための専門職大学院としての性格に鑑み、組織見直しを促進するため必要な法的措置を設けることとし、その具体的な在り方については、大学教育の特性に配慮しつつ、閣僚会議において2年以内に検討し、結論を得る。

- (2) 文部科学省において、法曹養成のための充実した教育ができる法科大学院についてその先導的な取組に必要な支援を1年以内に検討して結論を得た上、2年以内にその結論に沿った実施を開始する。

# 法科大学院における組織見直しの更なる促進方策の強化について

平成25年9月18日  
中央教育審議会大学分科会  
法科大学院特別委員会

## 1. 検討の必要性について

- 本年7月、政府に設置されていた法曹養成制度関係閣僚会議において「法曹養成制度改革の推進について」が決定され、法科大学院を中核とする「プロセス」としての法曹養成制度を維持しつつ、質・量ともに豊かな法曹を養成していくために、政府として講ずべき措置の内容及び時期が示されたところである。
- この政府決定の中で、法科大学院については、
  - 文部科学省において、中央教育審議会大学分科会法科大学院特別委員会の審議を踏まえ、1年以内に、公的支援の見直しの強化策など入学定員の削減方策を検討して結論を得た上、2年以内にその結論に沿った実施を開始する
  - 公的支援の見直しの強化策など入学定員の削減方策等を講じても一定期間内に組織見直しが進まないときは、課題が深刻で改善の見込みがない法科大学院について、法曹養成のための専門職大学院としての性格に鑑み、組織見直しを促進するため必要な法的措置を設けることとし、その具体的な在り方については、大学教育の特性に配慮しつつ、閣僚会議において2年以内に検討し、結論を得るとされており、これまでも増して、入学定員の削減をはじめとした抜本的な組織見直しに早急に取り組むことが強く求められているところである。
- 本特別委員会としては、この政府決定を受けて、法科大学院が法曹養成の中核としての使命を果たし、それにふさわしい教育の質を確保できるようにする観点から、
  - ① 課題が深刻な法科大学院について、抜本的な組織見直しを早急に促進する
  - ② 入学定員と実入学者数の差が拡大していることを踏まえ、入学定員充足率が著しく低い法科大学院はもとより、全体として入学定員の適正化を図るため、「公的支援の見直し」に関する強化策を早急に打ち出す必要があると考える。

## 2. 公的支援の見直し強化策について

### (1) これまでの取組

- 公的支援の見直しについては、課題を抱える法科大学院を対象として、「司法試験の合格率」と「入学者選抜の競争倍率」の両方の指標に該当した場合、国立大学法人運営費交付金や私立大学等経常費補助金といった公的支援の一部を減額し、自主的・自律的な組織見直しを促す仕組みとして、平成 22 年から公表・実施しており、これまで 24 年度予算では 6 校、25 年度予算では 4 校の法科大学院がその見直しの対象となっている。
- 24 年 9 月には、入学定員の適正化など課題を抱える法科大学院の組織見直しを加速させるため、上記 2 指標のほかに、新たに「入学定員の充足率」を指標に追加するなどの見直しを行い、26 年度予算では 18 校の法科大学院が見直し対象となったところである。
- これらの施策を通じて組織見直しを促してきた結果、本年 6 月現在、入学定員については、26 年度予定として文部科学省に報告があった総数は約 3,800 名まで削減される見込みとなっており、前年度比約 450 名（約 11%）の減、ピーク時の 19 年度と比較して約 2,020 人（約 35%）の減となっている。また、これまで 8 校の法科大学院が学生募集停止を実施又は表明しており、うち 1 校は本年 3 月末をもって廃止となった。
- 以上のように、公的支援の見直しは、課題を抱える法科大学院の自主的・自律的な組織見直しを促進してきているが、近年、法科大学院の志願者は減少の一途をたどっており、25 年度の入学者数は 2,698 人と制度創設以来はじめて 3,000 人を切り、入学定員との差も更に拡大するなど、法科大学院が置かれている環境は極めて厳しい状況にあると言わざるを得ないと考える。

### (2) 今回の見直し強化策において特に重視すべき点

- このように法科大学院制度を取り巻く状況が近年ますます厳しくなっていることを踏まえ、公的支援の見直しの更なる強化策を検討するに当たっては、
  - ① 課題が深刻な法科大学院の組織見直しを早急に促す観点から、その削減額の幅や適用方法・時期について検討するとともに、
  - ② 国際化対応や民間・公務部門への人材育成、継続教育など特色ある先導的教育や教育資源を有効活用した連携・連合の推進などを通じて、司法制度改革が目指していた魅力ある法科大学院となるよう、優れた取組の支援を通じた浮揚も視野に入れて、



全ての法科大学院を対象とした上で、各法科大学院におけるこれまでの取組を通じて得られた成果等を多面的・総合的に評価する仕組みに抜本的に改めるべきである。

- その際には、特に以下の2点について検討すべきである。
  - ① 司法試験合格状況や入学状況などにおいて課題が深刻な法科大学院については、これまでも課題を解決するに至らなかったことを踏まえ、抜本的な組織見直しを求め、これを基本とする。ただし、法科大学院としてのこれまでの蓄積を踏まえた他分野への改組転換や、成果を挙げている他の法科大学院との連合といった改善策を講じる場合には、それらの取組を促進するよう配慮することが求められる。
  - ② 多くの法科大学院において入学定員を満たすことができない状況が恒常化しており、法科大学院全体としての入学定員と実入学者数の差も近年ますます拡大していることを踏まえ、個々の法科大学院における司法試験の合格状況や入学状況等の実態を評価した上で、適正な規模の入学定員となるような仕組みを設ける必要がある。

### (3) 法科大学院の先導的な取組の支援を通じた改善

- 前述のとおり、法科大学院が置かれている環境は極めて厳しい状況にある一方、政府決定の中では、
  - 文部科学省において、法曹養成のための充実した教育ができる法科大学院についてその先導的な取組に必要な支援を1年以内に検討して結論を得た上、2年以内にその結論に沿った実施を開始するとされている。
- これを踏まえ、法科大学院について、先導的な取組の支援を通じて、その浮揚を図る観点から、公的支援の見直しに当たっては、組織見直しの取組や先導的教育への取組の促進など、将来に向けてより積極的な改善を促すことも可能となる仕組みに改めるべきである。
- 具体的には、より魅力ある法科大学院教育を目指した先導的な教育システムの構築や、法曹に加えてこれまで十分に対応できていなかった分野に人材を輩出する先導的な教育プログラムの開発、企業や自治体等と組織的に連携した就職支援とともに、他の法科大学院に対する教育支援、教育の質向上につながる法科大学院間の連携・連合といった取組を促進することが望ましい。
- なお、上記取組の具体的な例示は、本特別委員会において引き続き検討するとともに、実際にそれらの取組が適切なものかどうかを判定するための枠組みが必要と考える。

#### (4) その他留意すべき点

- 今回用いる指標については、引き続き司法試験の合格状況や法科大学院への入学状況といった現行の指標を基本にすることが妥当と考えるが、それぞれの指標の具体的な評価に当たっては、法学未修者の状況を加味するなどの工夫を取り入れるとともに、地域配置や夜間開講の状況にも配慮することで、法科大学院の実態をよりきめ細かく反映できる指標となるよう工夫することが望ましい。
- その際、入学者選抜の競争倍率については、本特別委員会による従来の調査結果や見解を十分に踏まえつつ、近年の志願者減少の動向等や法科大学院の浮揚が求められている状況も考慮した扱いとなるよう工夫することが望ましい。
- また、今回の更なる強化策を受けて、学生募集停止など抜本的な組織見直しを行った法科大学院に対しては、その移行期間中、在学生在が学修していることなどに配慮するとともに、既に26年度入学者選抜の学生募集を開始している法科大学院があることに鑑み、新たな仕組みの導入に当たっては、26年度入学者選抜における混乱を招かないように配慮することが望ましい。
- なお、公的支援の見直しを更に強化することによって、課題が深刻な法科大学院に対し抜本的な組織見直しを早急に促すことは不可欠であるが、あわせて、大学教育の特殊性などを踏まえつつ、中・長期的な観点から、法科大学院制度の安定化が図られるよう配慮することが望ましい。その際には、法曹はもとより、企業や自治体等との緊密な連携・協力を得ることを通じて、法科大学院教育の更なる充実・強化につなげていくよう配慮することが望ましい。
- また、これら公的支援の見直しの更なる強化とあわせて、法科大学院に対する認証評価について、課題を抱える法科大学院が自ら抜本的な見直しを図る仕組みとして、より効果的に機能するものとなるよう別途検討する必要がある。

# 「公的支援の見直しの更なる強化策」の基本的な考え方について

- ◎ 司法試験合格率、入学定員の充足率、多様な人材確保、地域性・夜間開講など多様な指標に基づき3つの類型に分類
- ◎ 各類型に関し、現在の入学定員の充足率を参考に算定した公的支援の基礎額を設定
- ◎ その上で先導的な教育システムの構築、教育プログラムの開発、質の高い教育提供を目指した連合などの優れた取組の提案を評価して、加算する仕組みを創設

27年度

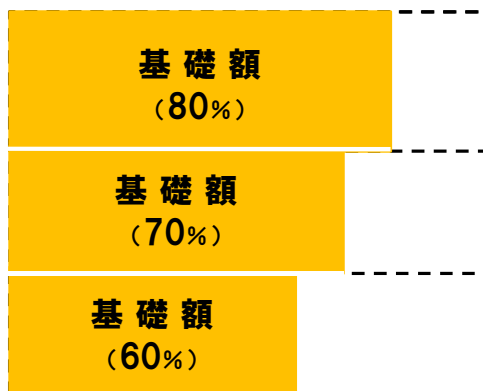
加算の可能性がある取組例

第1



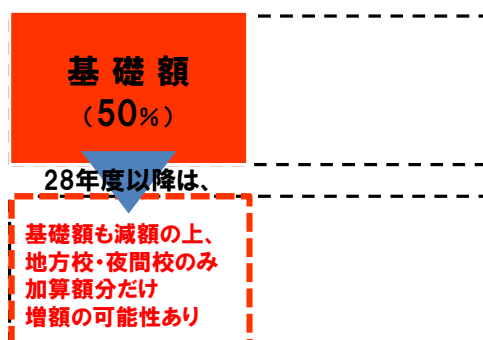
- 教育システム構築
- 教育プログラム開発、就職支援
- 他類型該当校支援プログラム

第2



- 教育プログラム開発、就職支援
- 連合、連携

第3



- 連合  
(28年度以降は地方校・夜間校のみが対象)

※ 加算額の算定の局面で入学者選抜の競争倍率を勘案し、額に反映。



